南總里見八犬傳 第九輯 二十四上

特
イ曽イ
600
275

特
19
600
275

南總里見八犬傳第九輯巻之三十四

東都　曲亭主人編次

第百五十回　貞行奥ゐ託く穉子を留む　毛野明ゑ察して死囚を免き

却説犬塚信乃。犬田小文吾ゐ早天ゐ瀧田の城を出て。只管ゐ路をいそぐ。稲村の城の宿所ゐかへる。隨即毛野道節莊介現八ゐ瀧田ゆくあり。事の首尾を詳ゐ告知して。老館の御懇命。犬江ゑ遲參を果敢るゑゐ。御意の趣い恁々。又那密義ゐ音音曳ゑ單ゐ即ちゐ別議ゐ。相秋びくゆんとゐのを。單妙真い這軍役ゐ漏されを恨まく且うち歎く。言果べくもあらざるゑ。亦忠義の誠心ゆく。雄魂の致ま所叱り禁るゐ由るけれゐ只得其情願ゐ信して。一緒ゐ來ゆ。該んゑの故ゐ。那穉子カ二尺八を。関くべゑ人あらぎるゑ。是のを事の不便ん。犬阪宜く計ひ玉

へと迭代ふ其々一五一十を解示せば俱ふ打聴く道節荘介現八も感嘆しく。音音に素より勇婦と老れども猶覚あるべし。曳る単節に弱女ゆく。姉妹共ふ稚子さへある。命危く敵地の間者ゆゑんと勇むにヨリ汐くて是さへある妙真の心操も亦愛て。実ふ那老女を執送されて。親兵衛が面正くも見えず。犬阪今又芸術あるやと齊き問へば。毛野が申す。事の捧合に天へ命へ三個の婦女子ゆく事足るべきを。又妙真の加ゆるも亦是自然の勢ひ。恁る義姑節婦と廣く江湖上に求るとも。一人ども汐くさかうんふ三婦ふ猶餘りあり。則是両館の御盛徳実ふ當家の洪福。恁れば妙真を相加へて。期ふ莅まば共侶ふ那敵所へ遣さんと不用意のゆるれば。まづ館の御旨を請まらざりしかど是等の小事ゆるとして。先千代丸ふ對面させく。後ふ禀上るとも。必や饒させゆゑん。犬川い咱ゆと俱ふ早く堀内許ねて主の命ふ仰を伺へく。豊俊を鞫問せ犬山と犬飼い妙真音音

曳る単節ゆ来ゆと俟く。両個の稚子カ二尺八をも各其母親ふ携させく。推續く背より来ゆ。カ二尺八のゆへも堀内曳ふ告て憑まば。左も右もせるべ。犬塚犬田い疲労を息へく。妙真媼の一條を館ふ申え上ゆゑ。日景短く時候るふ。卒ゆくべしといそぎ。大家是を好と。荘介い毛野と俱ふ身装ら。伴當を俱して堀内許赴けり。然が堀内父子の宿所い固ら當城内ふ在り。犬士等ら僑居所より。両三町ふ過ぎれば毛野荘介い早く件の宿所ふ走り。名簿を執接の若黨ふ渡して。對面を請しば貞幼則閑室ふ迎入れく對面あけり。登時荘介ゆ。事裏ふ芳翰をゆく。我毎七名ふ憑せゆゑ。逆徒千代丸豊俊ら恁々の情願をゆく。恩赦を願ひまるとゆえ一條を東荒川老ふ告て同意の上隨即館ふ申え上げまるしふ館の御内命い恁々と是ふよりて犬阪毛野ら敵を衂ふ秘策これあり。あの美い毛野ふ申ゆゑとゆ貞幼頭を抬げてそい厚

紀造化ゐの人咱ちあの夏致仕してより。いまゞ半年ゐ過ざるゐ老病漸々ゐ身ゐ逼
ひて。殆ど歩不便ゐひゐ。養嗣貞住ゐ君命ゐよりて。既ゐ召さ
せられ。今日欽明日ゐ還ゐ。ゑれども那千代丸の情願ゐ他を待つべき時宜ゐ。
已ことを得ざ各位を労ゐる義ゐ。亟の言上面目ゐ。御意の趣謹さ。義ゐ。
那豊俊の恩赦の願ゐ正ゐ他ゞ実情ゐ。只寛刑の仁恩を仰ぐの故ゐ。今
番の軍旅ゐ従ふ。死をゐ報ひまつらん。と庶幾ふの。他事ゐ。一旦御敵ゐ
那人さ。御仁政を感ずまるこかくの如。況や咱ゐ。当家相恩譜第の
臣。不能ゐして年居ゐ顕職を汚ゐ人として老ゐるゐ。朽惜ゐ者ゐ。両
管領の大兵十萬江を渡るゐ風聲を居ゐ。ふゐ。毛野を
見ゐ。噫。盍ゐ老の諄言憶ゐ無礼を仕ゐ。却犬阪主の計畧ゐ甚ゐ
る徹ゐ。猷れゐ。ゐまく。向れゐ毛野ゐ膝を找ゐ。翁ゐ当家中興の者

老ゐ秘策ゐ。告ざらんゐ。晩生ゞ計る所者ゐ。箇様々々。尾ゐ又箇様々々。
と豊俊ゐ詭らせ。敵ゐ降参を請ゐ。其折豊俊ゞ敵の陣所へ遣ゐ密使
那妙真ゐ。日音曳ゐ。単節ゐ。這老弱四個の婦女子ゐ。ゐ。事初ゐ。音音曳ゐ
単節ゐ。這軍役ゐ充ゐ。妙真ゞ漏ゐ。恨ゐ。切ゐ。誠心ゐ。已ゐ。
去意味ゐ。曳ゐ。単節ゞ。児子力二郎尺八ゐ。初ゐ。姑且妙真ゐ憑ゐ。任用ゐ。他ゞ
宿所ゐ。在ゐ。欲ゐ。妙真ゐ。亦役ゐ。従ゐ。這心当の槌外れ。情由ゐ。他ゞ
さ。ゐ。其崖略ゐ。解ゐ。言果て。又ゐ。却館の御内意ゐ。那豊俊の
情願の事。既ゐ。今日の鑒定ゐ。詭誦ゐ。思ゐ。十日十耳の視聽ゐ。
よ。その情ゐ。探ゐ。若们蔵人許ゐ。よく豊俊ゐ。鞫問して。言愈実ゐ。
毛野ゞ。計畧ゐ。用ゐ。とある。御上目ゐ。かくの如。ゐ。件の義姑節婦ゐ。今日
豊俊ゐ。対面ゐ。異日の便宜ゐ。故ゐ。那婦女子ゐ。道節と現八

が相伴ふく程ふく妻宅へ来たれとの弐を禀演んとく我们両個先こもて面談と
請ひ公元と告る詞の玉かい淀元辨ふ負分ハ都てそのあるを沼そ謹て答るこう
御内意の言の趣美りの公千代丸豊後を禁錮の弐臣ゑ致仕退隠の後の
そ仮貞住管りまつりく今ゑハ囚囚の外と饒さそ那人館の御仁政を感服して
軍功をそ那身の罪を償んと請ふ言の虚実い臣ゑ屢試く真実情ふるを
知れり遊莫料りく元い人の心之目今那身と牽出さん各宜く鞫問ふく変
就く又一議あり那妙真音音曳ゑ単節ハ皆是忠義の本性ゆく或ハ其
孫ふ代り或ハ其良人其稚子ふ代そ渡生死の海を怕ま俱ふ這回の軍
役ふ用ひらるを相教ゑを誰ゑ感佩せざる元後世までの美談をんを今れも
見ハ公然ふ老婦人と容顔美麗ハ女弟兄ゑ然いを今訟獄断の席
ゆく俱ふ臂を連ねさく未赦されざる罪人ふ対面させんハ倒ふ面正くもるを

所ゑるぞや所詮件の婦女子ゑハ異日敵地へ赴くまで鰥生宿所ふ留置て豊
後ふ対面致さもべ又那両個の小児カ二尺八ゑ其母親の軍役果るまで鰥生是を
管りく荊妻拙女ふ養せん荊妻も拙女も稚児を愛る癖あり女児ハ近曽貞
任ふ妻ゑ〜これハ〜ゑ子ゑ〜ゑそのゑ〜他一人の子ゑも都く稚ゑを見れハ放ちゑ
ざる本性ふハへハ他ゑ必教ひて衛もべ〜ゑの弐も心易りてんと意衷を具ふ説示
せハモ野いゆゑえ荘介も事の便宜を教ひて貞分ふ謝〜てハゆゑ御配慮の言の
趣其理ふ當ゑハゆゑ那四個の義姑節婦を一旦瀧田の宿所へ返〜て異日
敵地へ遣を折ふ又召ゑもゑハ不便ゑるべ〜然ると共宅ふ留ゆゑれゑハ是を知ふ
者稀ゑ〜く且豊後の密出使ふ敵地へ趣く身の出入ふ其所をゑるとゑハ〜況
カ二尺八を今政令愛ふ任用て其母親ゑハ役果るまで共宅ふ措れと
あふ一條ハ便宜の上の便宜ゆく特ふ安心住ゑ〜ゑ毛野も又云云と其歡

びを演る折から。堀内の若黨が。檐檻に歩み跪く。貞行に告るやう。犬山主犬飼主が。鄙に來りて次の間に在り。又郎君に上總より。方僅還りの旅とて。貞行うち驚て。開き待托しうけんか。疾這方へといそがせば。応く退く若黨の。案内に入て徐々と。這席に入る。両個の客は。是則別人にあらず。犬山道節忠與と。犬飼現八信道。そは背に立て。堀内雜魚太郎貞住。尚初壯衣の儘にて。躰く席末に坐を占れば。道節と現八は。先貞行に向ひて。致仕の後も恙なきを。祝して又道節が。ゆふべ。却晩生涯が今日の所役は婦人たちの宰領。その所以は鄙に妙真音音曳てひとよ。あやこ。ゆ單節母子が。當城に來りければ。開が侭又轎子にうち乘せて。併せて其人宅へ來ぬ。あらう。尚外視を數ふるあれば。胡意背門より舁入れさせ。今政早く知りぬ。俱しる婦人たちと稱兒毎を則奥へ迎させて。曾待さるうゆえ。折今一郎上總より。歸城あるに對面して。俱に翁に拜謁せんとて。次の間まで來ふけるに翁は犬飼

犬川と密談の最中なれば。詞の腰を折らんと思ひて。猶豫して言の果るを俟たず。主客の問答其大畧を聞くことを。はじめ貞住も亦貞住も親に向ひて額首。剛才歸城のうへ。且毛野莊介に向ひて。豫て知りあひけん。椎津の城主真里谷信昭主は則館の通家にして。那人年來強飲の癖なりけん。前月暴に身故りしに。子息は幼弱なれば。有司と諸士と。確執の中えらんの故に。在下館の仰を稟てのそなく上總に赴けり。前月より椎津の城内に在りて。件の確執を解諭して。一家の和睦を執扱ひ。事やう穏に平ぐ。老黨若黨和順あつ。力を勢せ心を同くして。幼主に忠を盡さんとす。則連署の拙言書を呈覧して。黨錮の罪を謝して。在下猶且その後を敬言按く。罷歸て思ふ程に大敵猛可に水陸より。推寄るべしと云風聲あり。其虚実いまだ詳ならず。両家老東荒川より。急遽脚の奉翰を。早く還るべしと下知せしまつるべ。

隨即椎津を立去りて。いそぎて歸路に赴く程に浦安牛助。登桐山八小森但一郎田稅力助も召れて各其曾る所の廳南榎本館山三郎固城と次役の頭人に讓り守らせて。連りに歸府をいそぐ。料ぎも在下と路ゆく一緒に。馬を駢べかるとそぶ仮隨即俱に大城に參上て。恁と伺へ上て。早く見參を饒されて。自他一樣に館に拜見を願ひ就中在下に猶且別室に召さなたまひて。大阪主の密策に依るべしとあり。軍陣の御隊配と御口親詳に仰示さるあり。実に面目身に餘る。欽びの涙の至。是に由て各位の連見の軍議ゆく。配慮のよりを查しまろ。今見に千代丸氏の一議を。偶蔽屋に光臨あり。在下宿所に在らざりければ。いまだ茶果の歎待にも及ざりけん。失敬海容あれと。陳る口謀莊介に勝て找ゆく祝して。開き愛ぶ。椎津の家中の確執に亟に解るべ。即ちるこを。ヨく月を魔せぎして。事理に和殿の

御も柄感心の外に。と応ずれば。毛野も亦貞任に向て。那拙策の趣に既に館の御直談ゆくに。ろ。且退いて長途の疲労を憩へ。ゆるぞや。と勧まば。貞任は唯々と応ず。亦復親に。椎津の一義も御前の首尾も。日今竹せあるが如し。況大阪主の秘策に用ひらるゝ。身の面目。欽せ。とのべ。貞任に點頭く。然て。そも異日のあるべ。今いそぐ。要事は這大阪大川の奉りて來まり。大阪。生拘の逆徒千代丸豊俊を。鞫問の一義は汝に這御上意を。能内兼西郎に伝へ示して。豊俊を書院に。檻に牢居させ。勿論汝は豊俊を。管見に宜く衣裳を改めて。其席末に列るべ。とふる。毎に貞任に応を。四大士に辭て。遽く退りけり。姑且しく堀内の若黨に。四大士に茶を看め。果子を薦めるとそ。程に又現八も御に。妙真音音に。早く來れける折の便宜を。毛野と共に仏に。

和殿們に後れしより。一二百歩の遅速あり。他們が早く來ぬるにて。咱們も既にその次の間にて。主翁の計ひを竢ことゆゑ。それより先に今番逹が件の婦幼六名を奥へ喚よりありしハ。臥合されど一家児皆是一肚児なりける。忠と義との好情の外ならぬにて。と誉れば毛野と莊介も。主人の徳を稱賛きて。歓び涯りなりける。浩処に又一個の若黨が。簷櫨に走り來て額を衝て。主人に朝ひく。千代丸氏を御糾明の准備宜くいと告るを貞行うち听て。さらんには犬士達卒書院へと若黨を先に立して案内にまかす。其身ハ徐に四犬士の後に跟て其席に造るに毛野莊介ハ當役なれバ端近く找みて書院の中央に居て。雜魚太郎貞住も既に公服に更めて貞行と相對して毛野莊介の左右に在り。道節現八ハ檢使　品ありて間六尺許退りて雙て其上坐に居り。是より以下ハ前家老隷の青侍鮑内兼四郎ハ衿の下を股まで袪り揚て腋挿の刀を。璫短に跨て。簷櫨の左の方に在り。その他ハ究竟の走卒五六名。或ハ豊俊に繋る簀縄の端を拿り或ハ皆杖捍棒を挾みて守りて簷櫨の上と下に在り登時四犬士ハ睛を定めて倶に千代丸豊俊を見るにその人年齢ハ三十許。面の色白く。白晢梁徹りて骨月逞く。坐身高く月額の迹六七分延黑みたれど囹圄に久しけれバ瘝痩もなく然ながらの憔悴なし。書院の簷櫨に席薦一枚布るに推登されて跪居たり。當番管見堀内親子が月屬惻隱ある所以なるべし。その中に單莊介ハ肚裏に思ふやう。六稔已前我身武藏の大塚で。籤上宮六們に誣られて。冤屈の罪に論ぜし折丁田町進が奸虐なる水火の責に命危く。生るとなりし身ハ恙なく。賤賢君に仕まつりて今日ハ人の罪戾を讞断の職役なり那時我ハ郷士の小厮今の豊俊ハ一城の主良賤素是同じからぬ他ハ叛逆我ハ忠義其做も所雲壤の差あるハ勿論なれども賢君上に在せバ悪

○文溪堂蔵

人も化して良善ふるる日あり。酷吏法を枉れば忠臣も誣られて罪ふるる罪ふ死ふる
者あり。是ふ人の幸あると幸ふるを儒い是を命とのひ老荘是を自然とのひ佛ふ
是を因果とそ以ふる哉と懐舊の臆念ふて惆然たり。當下貞住い豊俊を喚
かて曰く千代丸氏這個二位い當家の賢臣犬阪毛野胤智。犬川荘介義任又
上坐ふる大山大飼即是人這四個の人々館の御諚ふよりて。鞫問ふ筆ふべし。
具ふ荅稟しねと先そのころを以さまれば。毛野いそ儘端然と豊俊ふうち向ひて千
代丸氏儞ふ當ふ管見堀内父子ふ就て請稟ふ情願の言の趣ふ差池あら
ざるやと問れて豊俊頭を抬げて。然ハいい我性の愚ふ暴ふ素藤ふ奸詐を悟
らず。他と魚水の交りを做ふ遂ふ慮外の御敵と做るふ。墻壁隆車ふ
勝ふるれば城陷り士卒離散して身い是楚囚の今まで。仁君死刑を言ふ
且當ふ管見堀内吏の長者ふる禁獄の守り忽諸ふるも反て籠中の禽を

養ふふ只惻隱とのくせ。是ふよりて餓ず凍ず。坐して食ひ肘を枕ふて
睡るのみ。久ふるまで身ふ杖荅の呵責ふべを知ざるい則是君臣一致の仁心
ゆく。仰げば高ふ德澤ふ羞て報恩を思へども由ふ。願ふ所い這回の軍役ふ加へ
きて。死とも罪を償ふ欲ふの外いなく。亮察あれかと啣言ふて陳
ふを。毛野い笑て點頭て。好々。その美ふ応ふ。犬川目
今笑て如し。恩赦勿論ふべ。狡と問ふ荘介応ふせず。沈吟ふるそ程ふ道
節い怵難て。佶と現八ふ目を注せて。共侶ふ膝を找めて。盍ふ為ねば犬阪今其呂
囚徒豊俊の陳ふるい堀内吏の愬ふて。我守て所と増減ふ。只然ふ宅ふ
されば又拷問ふ及ぶまじ。這ふ再四の問答ふて。一言ゆく信容ふ。是千
慮の一失狡犬飼什麼と見ふれば。現八然と。領ふく。和殿の小心愚も同意
言と心の表裏ふを亟ふ知るべもふ。再三數四詰り問て。黄金白銀とそさ

るも。錫欽欽骨版い知れん。犬阪疎忽ふあらぎやと。詰れば毛野い合笑て。其頭の小心極めとよ。我才子路ふあらざれば。片言以訟を定むべくい思ひども。孟子の一書ふいるとあり。人の人ふめふ時。言の虚実を知まく欲せば。先其人の瞳子を見よ。瞳子偽々るふ。偽々るふ。と。教えそう。因て我今千代九氏と問答の折。其瞳子を相く考るふ。孟子の教果して違はぎ。その人の願ひ実情ゆで。虚言るゆを知るふ足れり。今更疑ふとりと。解きく道節現八も。其聰察ふ感佩して。又論る由もなし。莊公ふれそうち。空く。犬阪の鑒定。寔ふ公ふて。情るる者い其辭をよく盡さとを。公ぎ。千代九氏の公所。始終符節を合る如く。増減るれい是其情の一筋るる。照驗犬阪い早く自得して。相學さへ凡庸るれば。今相る所逸早くこの徠既ふかくの如し。実ふ敬服々々と。稱く同談の外るければ。貞幼も貞。任も四犬迭ふ善ふ與まく。已ふ勝ると忌ぎ嫌ふぎ。俱ふ公ふて偏頗るれい當家の寶えの上あり。

と感ずて。憑く思ひけり。偽而毛野い堀内親子ふらふゆう。各目今改めひ如く千代九氏の陳る所。其実情ふ凝ひる。館へえの芙を稟上げるば。罪免さるべれ者るれば。權且縲絏を解饒して。その処へ召升さん。咱ゆ尚問ふべれゆ。示ぎべるあり。一霎時士卒を退けゆくとふふ。負任るろふく。檻檻ふ侍る。毓内兼四郎と。ちやと。呉近つけく。事偽々と。分身れい兼四郎い応をるつ。豊俊の要青縄をる早く解ふく。坐席の方へ卒とだるふ。推找せく。却走卒ゆと。倶ふ外面へ退りけり。當下毛野い。豊俊と。身邊近く招よゆて。聲を悄めく。談るゆう。千代九氏和殿館の御仁政を感謝して。願ふ少如く。今番の戰ひふ。従ふとを。饒れるば。戰功をゆて。其身の罪を。償まく欲る。誠心寔ふ時を。ふうとふべ。るれども。弓箭刀剣い。僅ふ一両個の敵を殪ものを。雪ふだらく。大功を成さんや。和殿一箇の勇を負まで。我計ふ。従えとを。悄地ふ。肺肝を示ぎべ。和殿の心いふぞや。と。問へ。豊俊額

つ
衝に謝して。諸彦慈愛の執成ふよりて。喪ふべき我首を既に續ぐ事を。猶
後栄の頼とあふ縦水火の中へも。いろゝ推辭。何事まれ美ん願ひ早
く教へと答る詞勇ましく。天ふ拉ぎし地ふ拉ぎふ誠心氣色ふ見れば。道節莊
ふ現八ふ向へ貞行も貞任も現奬善の域ふ入りけるこの人成を事あるべ。と思へば
頬感嘆されば。姑且て毛野い又聲を低めく豊俊ふ示さる。千代丸氏我這方
すとのゝ。大敵と。劒ふせまく欲する。計畧を誨んと欲まゝ。と耳披まく耳ふ示
さと半晌許。逆毛野が計る所。那八百八人を始め。豊俊ふ伴せて。敵へ降
参の事の趣。其時豊俊が。敵へ遣を密使ふ。音音も老弱四個の婦人を。
用ふべしとあれが既ふ他もを召よせく。只今奥ふ在るこれ。先豊俊と面善児ふ
るさまく欲する前後の用心。送るこゝろをこさまれ。豊俊欣び意外ふ出て。忻然
として答ふる。千代丸氏の示教。兼りいひぬ。今情願を容られく。軍旅ふ従ふ。然

る大役ふ充らるゝ面目ふの上へいべ。この身ハ敵の士卒と倶ふ。燬ふ燔れ海ふ淪
むとも機ふ臨ミ変ふ応じて。必做さ事あるべ。この我ハ心易るべ。我身不肖ふ
いへども。父祖相伝の逆領を兼て。一郡一城の主ふ。恩顧の士卒ふ。
然れども其忠義の志氣あるく。且恥を知る者ハ。かの折戦殺して。餘子ふ
べ。その餘ハ城を一番ふ命を免れる。兵無ふいへ往方を索ふ召聚へ。今番の
役ふ従るとも。事ふ益有るかゝん。恥くいと陪話を現八ふ。ちゝ左ふ右も
あれ在処もあるふ其残党ふ。ちゝ左ふ右も
従まる。遅兵を犬阪ふ必准備あるん。といへ道節。然ハと応く。更ふ莊介ふ向ひて
いふやう。既ふ館の御内意あれ。今日よりして千代丸氏の禁獄を饒さ。けゝ
ふ故もく。囚囚より出さ。衆人必疑ふべ。とふを莊介ふ。其頭ふ
犬阪脱落あるん。犬阪什麼。と請問へ。毛野い笑ひ默頭く。賢兄達の心ハ

我思ふ所と相同じ堀内叟貞住主あの義をよくあろるゆゑ又千代九氏を
囲圍へ返して只守護を固くせば近日赦免あるべけれどとく由断の為体ゆく
日を過さば。その人囲圍を破り脱れ去りく。敵ふ降参もとらふ前後の進退吻合
せん敵と闘矢の日定くふ那地ふ造るふ又術あり。そもそもの折ふ談もべれ先音音多
四個の婦人を千代九氏ふ對面さるく異日の便宜ふ事整つ早く囲圍へ返さ
べしとふ堀内親子ろろるる貞住みづろう奥ふゆるく。妙真音音曳ふ單
節を推立て物く来ふければ四犬士則這義姑節婦ふ豊俊を對面させて。
密談既ふ果しふ貞住い先四個の婦人們を早く奥へ退けて。却葉
四郎們を呼聚へ又豊俊ふ腰縄被けく。牽せく囲圍へ返しけり。

作者少選。禿筆を閣く。且一服と煙を吹たり。漫ふ獨語て道ら。本輯前
前回ろ。のくふ至るまるく。密談商量の段甚ヨヨろ。皆是後回の襯染ふ

きばらざるとをろざりけり。大凡其趣あるく。看官ふべく歡ぶべ段い。誰も綴ちく
欲もべ。あるふかる花もるた平話を載く。丁寧反覆して。とく綴做せるを。則
作者の苦界とを然ば是筆の苦界と少省くば善綴り果さん事い彼雖貫李
笠翁の大筆ろるも必病る所ろくん狹。水滸傳を除くの外吾其書無ると雖
く見ぞ。本傳い水滸傳ろヨヨた者十回。水滸後傳を加えても尚十回餘り
あり。俗ふ云下るの長談義るべ。蓋小道といへども必見るべ者あり。君子い泥
んとを怕ろ。烏滸技ふ。烏滸の用心あり。看官作者の苦界を知ぐ。辛たも
苦たも雑くて。五味塩梅ふた意味いあれ是烏滸人の用心ふぐ。

第百五十七回　上總の民孝義再恩を稟く
安房侯仁心軍令を定む

去の日犬阪毛野犬川荘介犬山道節犬飼現八ろ。堀内親子の宿所ぞ。

千代丸豊俊と密談果て。僑居所へかへり。隨便犬塚信乃と犬田小文吾ハ件の事の趣を送もるく告知せるハ。信乃小文吾ハ力二尺八の事の便宜を欽びく。這里ゆも館ハ妙真の事ハ情由を。詳ハ申え上げ。ハ館の御感浅々ぶ。その後とも。事毎ハ我旨を請ふ。要る。毛野ゆと共ハ先相計ひて。後ハ告よと宣ひ。豊俊のゆも仆るゝんと告るを毛野いらち申く。遽莫密談も亦君命ハ依るゆるゆるハ疾禀上んと。荘介と共侶ハ遽く君所へまゐりて。則義成主ハ貞行の計ひ豊俊の美服通くあの日の事の便宜を。悄地ハ申え上あらべ。義成感心大々ゆるぶ。豊俊のゆ。あの上も毛野ゞ方すハ任せるとく。其挿紀を賞せ給ふ。左右ゆる程ハ十一月い盡僅ハるゝ一時候。豫武藏ハ在りける里見の間諜児ゆゞ。夜毎ハ快船ハ乘り走るゝ一つかへりゆて。敵地の動静を注進ゆ。然べ扇谷定正の五十子の城ゆ。加勢の諸侯漸々ハ着到の申えあり。

その隊々の大将い。山内顕定父子を首ハく。滸我の成氏石濱の千葉自亂白井の長尾景春越後の旅の大刀自及両管領扇谷山内麾下の諸城主大石憲重其子憲儀白石重勝。小幡東良るゝど。枚挙るハ遑あらぬ。あの他ハ武藏相模の野武士毎ゞ。招ざるハ聚い来て。両管領の隊ハ屬く者壁言ゞ群る蝗の如し。あの内中。山内顕定父子い。本月晦ハ勢汰あるゝん。十二月朔ハ鎌倉ゑ出陣して。二日三日の比五十子の城ハ入るべ。と云風聲あり。又相模の三浦義同甲斐の武田信昌い北條長氏の壓ゆる。或い子息或い親族を大将ゆて。加勢あるべ。と定めるゆ。あるハ義同の嫡男。三浦暴二郎い獷勇ハして膂力百鈞を挙るハ足れり。然れども頃日寒熱の恙あり。病臥ハ堪ずして出来ぬ。又武田信昌い。親族の中誰を軍代ハ為せ。あの美いまゞ詳ゆゞ。單内管領持資入道道灌い年来扇谷殿の。乱政を諫難く。糟谷の館ハ屏居をられ。

今番の役ふ従つる。子息新六郎助友をりく。其催促ふ元んとふのこ。助友もいまだいで来ず。是等の遅凝不参の諸将を除いても。其勢既ふ十萬餘騎陸い下總の行德囲府臺水路い徑ふ洲崎へ渡ーて。安房上總を略。もちもと云その言今日ハ昨日より細ーくて。疑ふべくもあらざれども。義成主い豫より思ひ込ーたる。ゆゑ。敢誤ぐ氣色ゐー。折ろう安房上總下總ゐる。自家の軍兵漸々ふ稻村の城へ着到ゐる者三萬五六千ふ做りーゐ。ゆゑ士卒の隊配ーく。水陸の備を立んとく。十一月二十八日ふ當囲洲崎明神の社頭ゑ本陣とーて。士卒を送るく聚合ら。總大將里見安房守兼上總介源義成朝臣い薄金の鎧錦綉の戰袍ふ精好の奴袴を張せく。大月形の大刀ふ皐皮の尻鞘被けるゑ佩做ふ。純金の麈毛を採ゑ。聳児ふ尻ゑ掛け。幔幕の下金屏建ふ。本陣の中央ふあり。次い婿男。里見御曹司義通小櫻紋の鎧戰袍ふ精好の奴袴猩

猩緋の草沓穿て。犀祖の名刀ふ。豹皮の尻鞘ゐる。を佩做ふ。尚童年の副將ゐれ。威風宛父祖ふ似く。聳児ふ尻ゑ掛ふ。相貌猛ふ。ゑ。愛敬あり。最美ーくゐ。ゑ。ゐる。這両大將の左右両側ふ華裃布せく。軍師犬阪毛野金碗宿祢滝智。水陸の防御使犬塚信乃金碗宿祢戌孝。犬山道節金碗宿祢忠與。犬川荘介金碗宿祢義任。犬田小文吾金碗宿祢悌順。犬飼現八金碗宿祢信道。鎧の紋糸。八彩ゐ。ゑ。ゐ。五色と間色ゐる。ゑ。戰袍以下の武具ふ各ゑの色を分てども。心い同ー忠義の壯雄信乃い村雨の大刀。桐一文字の匕首。莊介い雪條の両刀を帶ら。然ば毛野道節現八小文吾も。或い家伝。或い感得の名刀を帶ざる者ゐく。札ら。身冑。是星の頭鎧。臂縛脛衣ふ至るまぐ。あの日を晴と打扮ゐる。武勇胆畧一様ゐる。を。具ふ名狀ゑべらる。皆一列ふ侍坐ゐる。其左の一側ゆい當職の冢

宰。東六郎辰相。荒川兵庫助清澄。兵頭杉倉武者助直元。堀内雑魚太郎貞任。上總の館山の城の頭人小森但一郎高宗。田税力助逸友。上總の廳南櫃本両城の頭人浦安牛助友勝。登桐山八郎良干。武具孰も皇光やうゐく。斉くあゐ星列。その他致仕の老黨杉倉木曽介氏元。堀内藏人貞紀。小森衛門篤宗。浦安兵馬乗勝等い衰老出仕ゐ堪ざれども。當家の安危ゑの時るゐんゐ坐して食ひ温ふ衣く。屏居く身の幸えと思ひ人の道るゐんゐ。縱杖ゐ椎ひても。御陣ゐ從ひまゐらんとく。各再勤の願書をゐく。齊一請稟ゐ。彼成是を許しゆゑ。其父老く。其子易ゐ。則天の下の通義ゑ。老ゆゐ既ゐ功成りて。身退ひるゐゆゑ。故ゐ今直元貞任友勝高宗逸友ゐ。或い父ゐ嗣ひ。或い小父ゐ代りく。我ゐ仕へく。皆精勤の少えゐ。然るを老ゆをさへ軍陣ゐ駈入れゑ。當家ゐい人ゑ

やとく。他郷の人ゐ笑れん。ゑの義決しと無用ゑ。今ゆゐ。老ゆるを願ひ稱ひ。ゐを尉ひるゐ。ゐゐ。ゐの時各安然と屏居く日を過ゑを。慨しく思ひゐる。瀧田へ參りく。老館の御陪堂ゐ做りく。慰めまゐるね。然ゐを欲びゆゑ。名れ瀧田といへども敵を待ひ。龍城ゐゐるゐ。枉くゑの義ゐ從ひねと。叮寧ゐ諭さをく。隨即瀧田の老侯ゐゑの趣を告ゆゐ。義実主欲び感じて。件の四個の老毎を召ゑを連りゐりければ。氏元貞紀。篤宗。乗勝等ハ。各ゑの懇命を兼りく。倶ゐ感涙の找むを覚ゑ。現賢君の御計ひ。孝ゆく且慈悲。從ひまゐらびしゆく。倶ゐ瀧田ゐ赴ひく。權且ひ龍城ゐりけゐ。ゐを是昨日のゆゐゐゐ。今又一個の老実児ゐり。是則別人るゐゑ。量義ゐ上甘利墨之助弘世の為ゐ。主僕安身の莊園を與へられゐ。天津九三四郎員明也。と精悍ゐく武具して。其莊園の莊客二千名許ゐ。鎧甲を擐せく。率

来る。則東荒川両家老に就て。請京まゐる。大敵封域に泊むとの其外
云ある故に。今日ちかく敵を迎る。御隊配を定めんとて人々に知
アて。いろ〳〵萬一の報恩に仕へまゐらん為めに。推参仕りける。主ゆゑい黒之
助弘世の両館の御仁慈ゆゑ。絶る家を嗣ぎ廢る祀を。奥さとなりて仕へ
ども那身低弱多病ゆゑ。軍旅に従ひ難かりしあの故に臣等弘世の名代
とて。死をもく洪恩に報ひまゐらまく欲す。願ふは神餘金碗に由縁ある犬
士の隊に屬させよとの。情願老実也けれ。義成則九三四郎を召近つ
けく。みづから諭して。汝の情願所以なれども。人各其主の為ゆゑ。
汝は他を見ならふ。墨之助に仕へ。ら那身を終らせ。ゆゑを。職分に
做ぶ者と然れども。今。這軍役に従ふとも。我に仕る八犬士等。既に赦許を
蒙り。皆金碗宿祢。れば。墨之助に代る。足まり。夫孝子も其親の

清澄則阿弥七と隊士八を召よせく。館の御仁命箇様々々と。件の下知を
伝渡して。身の暇を取れば。阿弥七等い感謝に堪ず。則答言まをす。
御諚有りしまく。忝く美りはへども。初舎兄南弥六が重罪を饒させ玉
ひ。御恩澤の大きさ。他に身後も犬江殿及び老の御執成を。死栄の
あの花はゆ〳〵に。縦催促せられぎとも。今番の軍役に漏いで。後々までも人
通に。恩も義も辨知らぬ。烏滸の白癡とそいらめ。あの故に御役に立べき者に
いなども。増松を携て。御陣に参りはひ〳〵はいに御諚の重けれとそ。阿容々々
と〳〵引て退らば。必南弥六が霊塲に。酷く出りはいて。願ふは隨使せぬ
へと意衷を盡せ涙と共に引て。其子増松を。呼出して。清澄に見
せ〳〵かへ去まく。欲せぎ。又隊士八も其心操を陳く。願ひ言をまう。御諚に。何
弥陀の慈悲本願に異ゑぎ美りはへども。初謬て。老館を犯しまつりまく

欲しけ。悖逆の罪免れくれを。饒されく舊里る。椿村ゑ還りし日母ゑ恁と告しく。母親ゆゆうち泣く其御慈恩を。努る忘れそ。身を終るまで勉畊しく。年貢諸役も。人一倍ゑ身を入まく仕へまつれと切ゑ教ゆ。然ば今番の軍役ゑ欽びくまつるべしゑ則親の心ゑ。然ゆを御免を乞うと退らば母ゑのひとりとく。腹を立いんいくぐ當役を果させの人。然らでゑ親の心易かるべくんばいらでくとだろふ。額衝伏く。立も幻去らむ。甲乙共ゑ誠心の大々さるゑを強難る。清澄ハ退くく。義成主ゑ。阿弥七隊士八名ゑ陳情の言の趣を具ゑ。ゆえ上げしく。義成主感心浅くむ。現匹夫も。志を奪ゑべくむ。然ばとく。他們を勇士の隊ゑ在くせる。倘不幸ゑして。流箭剪丸ゑ命を殞もともあらん。欽是も。亦不便る。ゑの故ゑ。今他名三名とく。烽火臺の助役ゑ。但し増松ハ童年ゑ。ども洲崎木工三ゑ外孫荒磯南弥六ゑ後るをのて。氏を磯崎と名生ゆうせく。宜く助役の頭人とるをべし。因く阿弥七と隊士八名。倶ゑ増松の後見して。當津の烽火を。掌るを。職分ゑ。ゆよ勿論烽火ゑハ本役の士卒ゑ。其兵毎ゑ上日を偽へく。新舊一致くるべし。と重て下知ゑしく。清澄奉り罷出て。隨即増松阿弥七隊士八名ゑ。御諚恁とゑ渡しく。且烽火臺の士卒ゑ下知を偽へて。件の三名を遣しければ阿弥七増松隊士八名ゑ欽びいへばしく。ゑの民を漸々ゑ偽へ。ゆく。三萬五六千の諸軍兵誰ゑ感悦せざるべし。仁君上ゑ在まれば。畎圃の中ゑも忠信ゑ。天の時ハ地の理ゑ不如地の理ハ人の和ゑ。管領烏合十萬の衆をゆく襲ひ伐まく。欲まるとも臣民一和の我君ゑ。豈勝ことを得べけんや。と思ざる者るりけり。間話休題。ゑの日又義成主ハ。両家老辰相清澄。並ゑ軍師犬飯毛野。防禦使犬塚信乃。犬山道節。犬川莊介。犬田小文吾。犬飼現

八方に告示あり。我営外國の制度と思ふ約聞戰の得失い揔大將る者ハ係らぞとふとるーあるとて其君揔大將を擇ミ任ず時必ゑづらん郎刀を授けて賞罰を儘ずると漢の高祖ゑ韓信を舉用ける時の如し。即是この戈あり。その故ハ其從軍の偏將る者諺く敵の為ハ敗らるゝとある時い揔大將の罪とて。解官せれざるるー我皇朝も神代より早く這御制度あり。書紀文を照して知るべー。然ば國賊征討の揔大將ハ必節刀驛鈴を賜ふゝと賞罰を任ーのゑ蓋其中葉い忠文朝臣の將門を討ける時より近世義貞朝臣の尊氏直義を討ける時ゑ朝憲正ハかゝの如ー。あるハ世の降りゆく昨今ハ至そい舊例廢れて。然る制度るーヨヽくハ只其一隊の戰を上日とゝもゑれば其一隊の將る者諺く敵ハ敗られく士卒を喪ふとあるも揔大將の罪とせぞ。その故ハ軍令明るゝぞ。賞罰正ーゝぶれば血氣ハーて且名を好む者動ゝれば先駈

まぞ。軍法をゝろへぞ。ときく力戰を上日として。謀畧を好む稀ゝ丈事ハ臨て怕ゝ謀を好く成ゝ者い唐山聖人の用意ゝ豈力戰をのミ勇ありとせんや。あをのく。今我制度い隣國の軍法と同ゝゝぞ。水戰い我揔大將ゝ。又陸戰い義通をのく。揔大將ハ元れぞ。水陸共ハ進退い軍師防御示使ゝ。大士ゝの指揮ゝ從ふべー。大士ゝ倘失あらば必先我を罪せよ。大士ゝ皆軍功あゝぶ士卒も俱ハ賞祿を取せん我い素ゝゝ人を殺もことを嗜まぞ。況や那両管領ハ怨ゝ。ゝるを定正非理の恨を名とする欲敢我を征せくも我已ことを以ぞ。その備を做ものミ約莫聞戰の間其當の敵ハあゝぞい逼りく數ゝぞ殺さゆるを好とせん。只敵の大將をゝく生拘るをのく大功とも首を捕るを大功とせぞ。犯ものい法ハ処せん我衆ハゝの軍令を早く下知もゝ下ゝく則毛野信乃。道節荘介。小文吾現八ハ。名刀各一口をゝろゝ賜

ふべく。且命もべく。各士卒の軍法に違ふ罪ある時は。先斬く後に生よ。親兵衛と大角とも。俱に這大刀一口を賜ふべ。他ものを今。當陣に在ざるべ。親兵衛に賜ふを信乃に。大角に賜ふを。現八に渡し。措ん汝ら權且これを藏めて。異日他ものに授へよかし。他ものは這里に在らざるべく。我ものは閑に思ざる誠心をのべ。恁はいらえ宜くその意を查しねと。言深切に示しめべ。六犬士ものは拜し受て。恩命微軀に餘りあり。俱に犬馬の力を盡しく。仕まつらんとぞ亨しける。然ぞ辰相も清澄も及直元貞住も高宗逸友良千友勝是より以下の每もその命令を兼る者。皆共侶に感佩して畏りをぞ亨しける。偖も折から龍田る。東金萠二小湊目鱆船貝六郎ものは義実主の使を兼り。主僕俱に武具して。既に當陣に來ふけるよ。今命今の最中なれ。其從兵を退けく。權且幕の陰に居り。言の果るを待らける。